

熊本地震

3 避難所に食事提供1カ月

熊本市 雲晴寺 1食最大、おにぎり1600人分

熊本市南区城南町の雲晴寺甲斐孝文住職(左)は「避難先に食べ物がない」と助けを求めて来た門徒の声に応じ、本震のあった4月16日から5月16日までの1カ月間、避難所に食事を届け続けた。



被災者の求めに坊守・門徒が奮闘

4月16日、避難所と日に開設された宗派・下益城・城南熊本地震支援センターに避難している門徒で、すぐに食材と初めておにぎりを届け、すぐに食材とた。しかし避難者全員た。また、九州をほじの分はなく、高齢者とめとする宗門関係や一般の団体、個人からも子どもを優先に配ったところ、かえって非難食材の提供や炊き出しの的になってしまったという。「全員に配ろう」。甲斐貴美子坊守は決心し、すぐに近在の避難所3カ所に1600人分のおにぎりを届けた。

3日目からは、朝食と夕食に1200人分のごはんとおかず、汁物など4品を集まった食材で作るなど、一日中食事の準備に追われる生活が続いた。門徒たちが避難所から手伝いに来てくれたが、自身も被災しているため寝不足と心労が重なって体調を壊してしまい、次第に人手が不足していった。

その窮地を、4月21

を持参、鹿児島、熊本両教区の仏婦・若婦会員らで250人分の弁当とたんご汁、ぜんざいを作った(写真)。

1カ月に及んだ食事提供。避難者は「最初にいただいた、おにぎりの味が忘れられない。本当にうまかった」と喜んだ。

最初に助けを求めた吉川智諭子さん(55)は「坊守さんだったら何とかしてくれるとお願いした。坊守さんが動いてくださり、お寺を中心とした人と人のつながりの広がりや食事を作ることができました」と支え支えられた日々を振り返った。